

口頭発表「みて ふれて 感じるこころ」 —互いに認め合い、受け入れ合える幼児を育てる—

大森理枝子



1 はじめに

本園は、昭和45年4月に豊島区立幼稚園第1号として開園し、創立38年目を迎えました。近くには「おばあちゃんの原宿」で全国的に有名になった「巣鴨とげ抜き地蔵」があります。小学校と併設で、4歳児・5歳児それぞれ一クラスずつの小規模園です。現在59人が在園しています。

園庭は狭く、恵まれた環境とは言えませんが、さくらの木をはじめ、うめ・びわ・みかん・ぶどうの木々が園舎を囲むように植えられています。収穫の時期には、子どもたちと一緒にこの実をとり、みんなで旬の美味しさを味わっています。園庭はアーバンで土が少ないとことから、わずかな空間も利用して小さな畑をつくり、季節の野菜を育てながら、そこに集まる生き物さえも大切な環境として生かしています。毎年、カエル・カマキリ・コオロギが卵を産んでいます。昨年の夏はカナヘビが三匹生息していることが分かりました。

飼育動物はウサギ一羽・モルモット2匹・カメ3匹・ザリガニ・カブトムシ・メダカ・を飼育しています。ウサギ・カメは主に年長が飼育を担当し、今回、発表の主役となるモルモットは5月と11月に購入し、現在、各クラスで飼育しています。

2 主題設定の理由

幼児期は、家庭という小さな社会から、外の世界にある様々な人や物の存在に目が向いていく時期であるといえます。かかわりが広がるにつれて、相手の思いに気付き、

互いに受け入れ合える力の基礎が培われていく重要な時期です。

外の世界の一つに飼育動物があります。一般的にみて、飼育する種類や数に差はあっても何らかの生き物を飼っているというのが幼稚園です。子どもたちにとって飼育動物は、みて、ふれることができる身近な存在です。飼育している生き物は、人間より小さくて弱い存在ですが、子どものこころを大きく揺さぶる存在であると思います。

ところが、そう思っていても、これまで私たち教員は生き物を生命ある物として大切に飼育していたんだろうかと振り返ったとき、生命の大切さを教えてくれる飼育動物をもっと生かした教育がしたいと思ったのです。子どもたちに思いやりや優しさ、がんばり、誰かがやるのではなく自分がやらなければ生き物は死んでしまうという責任感、自己肯定感がもてる幼児を育てたい。友だちを思いやる気持ちを育てたい。そこで、飼育動物がもつ力を借りて、教育に生かした研究をしたいと考えました。

3 教師の願い

- 飼育動物とのかかわりを中心に、自分も動物も共に生命あるものとして大切にしようとする感性を育てたい。
- 友達と協力し、継続的に飼育を続ける中でいろいろなことに気付いたり発見したりしてほしい。
- 自分以外の相手に対して思いやりの気持ちをもち自他共に受け入れられるようになってほしい。

4 具体的な実践

(1) 第一回ふれあい授業の開催

4月から積極的な飼育がスタートしました。そして、以前から、飼育しているウサギのリボンちゃんが人に慣れず、どうしたらよいか悩んでいたのをきっかけに、獣医師の中川美穂子先生と地域の獣医師藤村環先生をお招きして5月に第一回ふれあい授業を開催し、生き物の正しい飼い方を学ぶ



ことから始めました。

参加者は動物の飼育を主にしている5歳児が中心です。保護者にも、この活動をご理解頂くために、子ども達が動物を抱くときの補助として参加を募り、動物について一緒に学ぶ機会にしました。ここでは、人間・ウサギ・モルモットの心臓音を聴診器で聴き、生き物によって心音の速さが違うことを学び、また、動物が怖がらない抱き方を教えてもらいながら全員が動物を抱く体験をしました。ここでは、ウサギやモルモットは大勢の人に抱かれるとストレスがたまるほど弱い生き物であることを知りました。

ここでは、①人間がいやだと思うことは、同じように動物もいやだと思っていることに気付いてほしい。②動物は人間が怖い。やさしくしてあげると人になれてくれる。③動物は汚い部屋が嫌い。汚れいたら掃除してあげる気持ちをもってほしい。④食べることに休日はない。幼稚園は休みでも食事ができる環境をつくってあげてほしい。⑤地域の獣医師と連携し、動物の健康管理と正しい知識を得ること。など、多くのことを保護者も教員も共に学ぶことができました。この機会に、新しくモルモット2匹を購入しました。名前は、年少組は「ももちゃん」・年長組は「しろななみ」と決まりました。



(2) 第二回 ふれあい授業開催

4歳児とその保護者を対象に、獣医師の藤村先生をお招きして7月に開催しました。4歳児のほとんどがモルモットを抱くのは初めての経験でした。このときは、かわいいという感情よりも、どう扱って良いか分からず怖さとぎこちなさがありました。しかし、この経験をきっかけに、教員は子どもと一緒にモルモットの新聞を取り替えたり餌をあげたりしていました。あるとき一人の子どもが、モルモットにあげるキャベツを飼育ケースにそっと入れ、モルモットがキャベツを食べると「あっ、僕の食べた！」と嬉しそうに目を輝かせて報告することもありました。それから少しづつ親しみを感じはじめ、家庭からキャベツ・リンゴ・ブロッコリー・ニンジンなど、モルモットの好きな野菜を探したり食べやすいようにと子どもの依頼でカットしてもらってきたりするような姿が見られました。

(3) 夏季休業中のホームステイ開始

ふれあい授業で「自分たちがいやだなおもうことは、同じように動物たちもいやだなと思っている」ということを学び、飼育の大切さを感じた私たちは、夏休みに入るのをきっかけに、毎日どこかの家庭で世話をしていたいただくことを積極的に呼びかけ、協力のお願いをしてみました。

モルモットは持ち帰りやすいのでまずまずの人気でした。しかし、ウサギは、本当は飼育したいけれども様々な原因もあり環境として難しいという糧もありました。そこで、夏休み中、親子登園して世話をしていたいただくような、取り組みやすい方法を工夫しました。すると、野菜や新聞紙をもって登園し、一生懸命に世話をしてくれる親子の姿がありました。特にこのとき、ウサギを抱く、お母さんが真剣そのものでした。この活動は、飼育動物をもっと身近に感じるきっかけとなり、保護者の理解が深まったと感じました。お手元の資料で、夏の生活での保護者の方が書いた感想からも理解できると思います。

(4) 事件発生 「猫にさらわれた！」

夏休みが終わり、始業式の朝にそれは起きました。職員が子どもたちを迎え入れるため、いつものように園庭側のドアは全開。ホームステイで帰ってきた「しろ ななみ」がみられるようにと、準備を整えました。ほとんどの教員が職員室にいたときです。

誰もいない保育室に大きな野良猫が侵入し、あつという間に「しろ ななみ」をくわえて逃げていってしまいました。いくら近所を探し回ってもまったく見つかりませんでした。私たちは、この事実を子どもたちや保護者にどう伝えようかと悩み、失意のどん底に落ちました。しかし、正直に伝えようと決め、ありのままに話しました。ホームステイから親しみを感じていた子どもたちのショックは隠せませんでした。前日まで預かっていた子どもは納得がいかず、涙ながらに「返さなければ良かったよ」…担任としては「ごめんね」とあやまるしかありませんでした。

しかし、教員があやまる姿に、「大丈夫だよ、先生」「見つかるよ」と逆に慰められてしまいました。このことは、飼育する側には、生命を守る責任があるということを強く自覚した出来事でした。一つ救いは、無惨な姿をだれも見ることなく過ぎたことでした。この事件から、みんなの心に「仲間」としての意識が高まっていったのです。「しろ ななみ」がかけがえのない存在だったことを実感しました。

(5) 「新しいモルモットがきたよ」

しばらく時を過ごし、運動会も終わった10月の下旬、獣医師の先生にお願いし、新しいモルモットを購入することにしました。

「しろ ななみ」を心の中でかすかな望みで待ちながら、飼育動物に愛着を持って世話を続けていた年長組に、新しい仲間として、ななみにそっくりなモルモットがやってきました。子どもたちは大喜び。「今度は猫に捕まらない強い名前がいいよ」…たくさんの方々の中から「みなみ てつ」に決定しました。



おなかがすいたと鳴く姿、大好きなキャベツを手から食べる姿、大急ぎで寝床に隠れる姿…愛らしい姿に「しろななみ」を重ねあわせて世話を励む年長組でした。

(6) 第3回 ふれあい授業の開催

あらかわ遊園地「ふれあい広場」に行こう！

公共の施設を活用し、荒川区にある遊園

地の「ふれあいひろば」というところに遠足に行きました。ここには、園では体験できない、ヤギ・ヒツジ・シカなどがいて直接ふれることができます。ここにいる動物は、人によく慣れた動物たちです。子ども達はヒツジの毛にさわって、そのぬくもりを肌で感じ「あったかい」とつぶやいていました。やぎのおなかにさわり「なんでこんなにお腹が大きいのかな」「赤ちゃんがいるのかな」というと飼育係が「ヤギは胃袋が4つもあるんだよ」と教えてくれる場面もありました。施設ならではの経験ができました。

日々の生活の中に継続的に含まれる飼育活動を通して、自分以外の相手に対して思いやりを持って理解しようとする姿が育つていったと思われます。自分だったらどうだろうかという想像力を働かせて相手を理解しようとする感性の芽生えを実感することができました。



5 <動物の飼育によって育つもの>

- ①「愛する」という心
- ②命の大切さの理解
- ③思いやりの心
- ④動物への興味
- ⑤判断力、決断力、解決力などの生きる力
- ⑥円滑な人間関係の構築
- ⑦動物(自分より弱いもの)の扱い方の理解

6 おわりに

子ども達にとって動物は興味ある物です。心がわくわくする物です。そこに感じる心が育つのです。自分たちが動物たちの生命をつないでいるという経験は、自信につながりました。子どもたちの間で、大きなウサギが抱けるようになった友だちの姿は、優しさやよさに気づいていくきっかけとなりました。生活が生き生きとして、自信がもてるようになってきました。子どもが成長する背景には動物のことを理解する教員の言葉かけや見守りが大きな力となりました。飼育に携わる者の責任として、私たち教員が飼育動物についてしっかりとし

た知識を専門家に学ぶことは重要です。その上で、子どもたちに生命の大切さを、責任持って伝えなければなりません。私たちは、飼育の知識・動物の健康管理・安全な環境を整え、動物を大切に育てることは、人を育てることと同じなのだということを学びました。残念ながら豊島区には獣医師と教育委員会との連携がまだ図られていません。今回行った、この研究がその突破口

になるよう働きかけていきたいと思います。最後になりましたが、この研究を支えてくださいました、中川美穂子先生、豊島区獣医師会の藤村環先生に心から御礼を申し上げ、私たちの報告を終わります。ご静聴ありがとうございました。

(豊島区立西巣鴨幼稚園副園長)

